「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」予備調査報告

尾崎孝宏・桑原季雄・西村　明

1．本プロジェクトの目標および先行研究のレビュー（尾崎孝宏）

本報告は，鹿児島大学多島圏研究センターの共同研究プロジェクトである「南北連続『新・道の島々』センサーゾーン拠点形成～地球温暖化学際研究前進拠点と国際・地域貢献～」（鹿児島大学平成17年度教育研究活性化経費，以下「新・道の島々プロジェクト」と標記）の一環として行われている人文・社会分野研究「東アジア沿海地域における闘牛をめぐるネットワーク形成の現状」（以下「闘牛プロジェクト」と表記）の初年度における中間報告である。具体的には先行研究のレビューと各地の予備調査報告がその中心部分をなすが，それに先立ち，「闘牛プロジェクト」を含む共同研究プロジェクトの全体像を示した後で，その中での「闘牛プロジェクト」の位置づけを述べたい。

鹿児島大学多島圏研究センターでは，1999年より総合研究プロジェクト「多島域における小島嶼の自律性」を開始した。これは鹿児島より南方の海域に散在する小形の島嶼群を対象として，多分野よりなる研究者グループがそれぞれの専門領域を生かしつつ個別の課題研究を実施して成果を挙げるとともに，その成果を有機的に連携させ，総合させることで「小島嶼の自律性」を可能にするための条件を探ることを目的としている。

そうした大きな方向性の中で，本年度より南西諸島を対象とした調査研究である「新・道の島々プロジェクト」がサブプロジェクトとして開始した。その主たる研究対象は「道の島々」つまり九州から台湾に連なる島嶼部であり，地球温暖化や当該地域社会の変容をいち早く察知するためのセンサー

ゾーンの形成，あるいは現地での研究協力者ネットワークの形成が研究目標として挙げられている。

それを受けて「闘牛プロジェクト」は，その名のとおり闘牛という文化イベントに着目して発足した。「道の島々」の一つである徳之島で闘牛が盛んであることは，本論で改めて説明する必要がないほど有名である。また後述するように，徳之島に限らず日本各地に点在する闘牛は既にいくつかの分野で研究対象となっているが，これらの研究は一地点における定点観測的な研究およびその集合体としての比較研究として行われているものが大半である。

しかし現状は，後述のごとく2004年10月23日に発生した新潟県中越地震で被災した牛が徳之島に避難して現地の闘牛大会に参加した，というニュースに代表されるように，闘牛の主催者団体・参加者・牛のいずれのレベルにおいても個別地点の範囲を超えた広域的なネットワークを形成しており，この網の目の中を人・牛・情報が往来していることが予測される。ただしこうしたネットワークに関する分析は，従来の定点調査においては不向きな研究対象であるがゆえに，等閑視されてきた嫌いがある。

そこで「闘牛プロジェクト」では，闘牛を媒介にしたネットワーク形成の現状分析から，東シナ海を中心に日本海・太平洋の一部も含む東アジア沿海地域における，文化イベントを焦点とした地域間交流の可能性を提示することを目標とした。なお「闘牛プロジェクト」は，「道の島々」に属する徳之島や沖縄が闘牛においては単なる「道」すなわち通過点ではないネットワークのハブとして存在しており，かつそのネットワークの広がりが「道の島々」の延長上に分布している[(1)]がゆえ，現地の研究拠点形成および対象地域全体の理解の一助にもなるという点で，親プロジェクトである「新・道の島々プロジェクト」の一端を担うという位置づけを行っている。

その中で，本年度は南西諸島の闘牛の二大ハブ地域である沖縄・徳之島，比較対照としての宇和島，仔牛の供給地である八重山の4地点での現地調査を予定しており，個別の調査報告のとおり3箇所で既に調査を終了している[(2)]。また研究方法としては，「闘牛プロジェクト」参加者である尾崎孝宏・桑原

季雄・西村明の3名が共通のバックグラウンドとしている文化人類学的手法（現地調査による観察・聞き取り）により行われている。ただし，今後の分析視角については尾崎が畜産の対象としての牛，桑原が主催者団体，西村が参加者とすることで，より広範なトピックを取り扱う予定である。研究体制については，本年度は基本的な知識・経験の共有を目的として複数名による現地調査を行っているが，今後はより少人数で機動的に現地調査を行うことで，より効率的に広域エリアをカバーする予定である。

さて，以上のような認識の根拠となる先行研究のレビューを次に行おう。まず，既存の論文や著作について，その対象地域ごとに分類すると以下のようになる。なお，これらの文献は，国立情報学研究所のCiNiiおよびWebcatから「闘牛」をキーワードとしてヒットした文献および，それら文献に引用されている文献から構成されている。

徳之島：小林照幸［1997］，曽我亨［1991］，松田幸治［1982］，山田直巳［2001; 2004］
沖　縄：謝花勝一［1989］，前宮清好［1972］
愛　媛：石井浩一［1992; 1993］，石川菜央［2004］，愛媛県教育委員会文化財保護課（編）［2002］
隠　岐：山田直巳［2002; 2003］
岩　手：藤原弘［2001］
新潟および愛媛：広井忠夫［2002］
多地域：石井幹［1989; 1990a; 1990b］，広井忠夫［1998］，松田幸治［2004］

この中で，最後に挙げた多地域に関するものは，基本的に各地の闘牛の現況紹介である。また，そのうち広井［1998］は自らの主たるフィールドは新潟であることを，松田［2004］は徳之島であることを述べている。そのほか，山田と石川が2箇所のフィールド調査経験を持つことが上述の先行研究およ

びその他の情報から推測可能であるが[3]，それ以外については1箇所のフィールドのみに関する著作である。つまり，上述の20点のうち9点，15著者のうち8著者がそれに該当する。いずれから計算しても，半数近くは1箇所の闘牛にのみ関わる文献であると結論付けられよう。

一方，地域別の分布については徳之島と愛媛が他の地域よりも数的に多く，比較的研究が進んでいる地域と位置づけることができよう。そのうち，徳之島は民俗学者とジャーナリストの独壇場であるのに対し，愛媛については民俗学に加え人類学（スポーツ人類学：石井浩一）・地理学（民俗地理学：石川菜央）と研究者の専門分野の幅が広いのが特徴となっている。無論，上述の研究においては，筆者が独断で専門分野を民俗学と分類したものでも，現在の最先端の研究である以上そこにはいわゆる「伝統」のみならず，広く社会経済的な現象に目を向けたスタンスが取られていることは論を俟たない。しかし，これらの著作が民俗学的研究を目指す以上，ある行事を通じて地域共同体を浮かび上がらせるというテーゼから完全に自由であることは困難であるようにも感じられる。

例えば，曽我は牛の売買に関する詳細な報告を行うにもかかわらず，最終的には「闘牛は『ランク』の頂点を目指しておこなわれるゲームである（中略）牛のランクもまた持ち主に転嫁されていると考えられる」[曽我　1991：44-45] と，ギアツ流の「彼らの意味の世界」[ギアツ　1987] にその着地点を求める。また山田は「闘牛の社会経済的考察」と題した論文で「闘牛は徳之島というやや自己完結的な社会の中で，非常に重要な社会的機能をになってきた」[山田　2004：215] と，やはり共同体内部の論理を模索する。なお隠岐に関しても，研究者が同一である以上，似たような研究傾向が見出される。沖縄に関しては，意外にも近年の文献が存在しないこともあり，現状報告を超えた理論的バックグラウンドに関して最新・最先端とは呼びがたい状況にある。

しかし，山田が上記論文を発表する数年前，既に広井は徳之島の闘牛牛について「今では新潟経由ではなく直接岩手県に行って仕入れてくる。軽米町，

山形村などによく見に行くという」[広井　1998：32] と記述している。また，筆者の乏しいフィールド経験の中でも，徳之島では八重山産の牛が多いと語る観客（ただし本人も牛主である）が存在し，また徳之島と沖縄本島を頻繁に往復する牛・牛主・勢子などは珍しくない。つまり少なくとも闘牛に関しては，徳之島は自己完結的ではない。またそれゆえに徳之島の闘牛は，ローカルな意味の世界だけでは把握しきれない豊富なボキャブラリーを含有する事象であることが推測される。

それでは，研究の幅がより広いと思われる愛媛の研究についてはどうか。同時代的な事象に最も強い関心を示しているのは石川 [2004] である。石川の研究においては，徳之島から宇和島へスカウトされてきた勢子の事例紹介など地域を越えた闘牛を巡る社会的ネットワークの存在が示唆されている。しかし，最終的に議論は「宇和島地方での闘牛の存続要因」の解明へと収斂し，広域的なネットワークは地域に関する議論の背景へと押しやられる [石川　2004：964-970]。

以上のような先行研究のレビューを通じても，「闘牛プロジェクト」が目指す主催者団体・参加者・牛が形成する広域的なネットワークの調査研究は，従来着手されていない独創的な着目に由来する研究であることが明らかであろう。

2．沖縄予備調査報告（西村明）

沖縄本島は，毎週のようにどこかの闘牛場で闘牛大会がおこなわれていると言えるほど，闘牛が盛んな場所である。2005年の予定を例に言えば，年間34の大会が組まれている。沖縄における予備調査には，尾崎と西村が参加し，具志川市の安慶名闘牛場の見学と，2005年９月11日日曜日16時から沖縄市営闘牛場で行われる予定であった「準全島靖士だ友人会結成大闘牛大会」（主催：胡屋闘牛組合，共催：琉球新報社，後援：沖縄タイムス社）を観察した。ここでは，闘牛大会の様子について報告したい。

われわれは15時過ぎに会場に入った。遅い取り組みであろうと思われる牛

を乗せたトラックもこの時間帯に会場入りしていた。入口にテントが設営されており，そこで入場料３千円を払う。入口付近にはほかに飲食物を売る出店や，過去の闘牛大会の様子を収録したビデオを売る業者の出店があった。この露天で売られるビデオは，徳之島と同様，牛の牛主が次の対戦相手を研究するときに使用するもののようである［曽我　1991：６］。入場料と引き換えに，当日の取り組み表（Ｂ４版）と，翌週９月18日におこなわれる「石川イベント広場閉場記念闘牛大会」，翌々週９月25日におこなわれる「野國總管甘藷伝来400年祭記念闘牛大会」の予告取り組み表（Ａ４版）が手渡される。会場に入ると試合開始まで，スピーカーから繰り返し「ワイド，ワイド，ワイドー，我きゃ牛ワイドー，全島一ワイドー･･･」と徳之島闘牛のことを唄った新作シマウタ「ワイド節」が流れていた。

会場となる沖縄市営闘牛場は，沖縄南インターチェンジのすぐ近くにあり，市営体育館や陸上競技場に隣接している。那覇インターチェンジからのアクセスは15分ほどの場所である（なお，沖縄市は，那覇市から北北東22km，沖縄本島の中央部に位置している）。

会場の様子は，土俵部分を中心に，その周りを１ｍほどの高さの土手が囲み，土手の上には鉄パイプ製の柵が設けられている。柵から外は客席部分となり，階段状のコンクリート作りの椅子席が14段の高さまである。その一角には，牛の入場口があり，入場口の向かい側には本部席が設けられている。そこには，主催者の関係者と思われる人物と司会進行役が座っており，賞品となるミニバイクやDVDデッキなどが並べられていた。また，入口の露天ビデオの業者のものであろう，大型のビデオカメラが２台，それぞれ客席最前列の別角度に陣取り，土俵の様子を狙っている。客席の外側には，ナイター設備も４基設置してある。９月末から６月頃までの大会は正午あるいは13時に開始されることがほとんどだが，夏場は16時や18時といった遅い時間に開始される。そのため，試合の最後のほうの取り組みでは，ナイター照明が灯されることになるわけである。牛の入場口から会場の外に出ると，出番を待機する牛のための細長い牛舎が設けられているが，一頭ずつ壁で仕切られて

おり，前面の壁にはそれぞれの牛の名前を書いた紙が貼られている。

会場では15時40分になると，闘牛場の土俵側面の土手一円に塩がまかれ，牛の入場口に盛り塩がおこなわれたが，おそらくこれは浄めのためと思われる。その後，アナウンスが入り，新聞の予定掲載時間が17時からとの誤記があったため，あいだをとって16時30分から開始する旨が伝えられた。

開始５分前には，牛の準備を呼びかけるアナウンスがあり，牛主の名前や牛の体重，出身地，戦歴などが会場に伝えられる。また，試合によっては懸賞品がつくものもあり，それも報告される。時間になるとそれぞれの牛が４～５名の勢子とともに入場してくる。入場口はひとつであるため，一方の牛が先に入り，続いて対戦相手の牛が入場するかたちである。取り組みを行う牛は尾の先に紅と白のはちまきを巻いて識別を行う。牛には鼻ひもが通されており，牛同士が頭を合わせて取り組みが開始すると，そのひもはすばやく抜き取られる。なかには，ひもをいったんはずした後に，なかなか立ち合いがうまくいかず，ひもをもう一度通して，仕切り直しするケースも見られた。牛が，立ち合いを拒むと，会場から「ああ」というどよめきが起こる。

取り組み中，勢子はそれぞれの側から１人ずつ牛の左側に立ち，声と右手のしぐさで牛に指示を出す。牛に触れることもあるが，左手は後ろ手にしたりして，出すことはなかった。攻めを促すときには，もちろん個人差はあるが，「デーワ」などの掛け声（ヤグイ）を張り上げつつ，牛の顔の近くで右手（特に指先）を下から上に激しく動かし，右足で地面を何度も踏み鳴らす。勢子もかなり体力を消耗するようで，２～３分毎に別の勢子が近づいてきて交代を促していたが，これは同時に，出番を待ちきれないからといった様子でもあった。勢子たちは違う牛の取り組みでも同じ顔ぶれが何度も登場していた。

勝利した牛の角には，勢子が自分のタオルなどをくくりつける。また，背中には，本部席から手渡された化粧まわしが掛けられる。中には，牛主の子供であろうか，牛の背中に乗り勝どきをあげている風景も見られた。

沖縄市営闘牛場は最大で４千人収容できるとされるが，当日の観客の入り

は，18時時点で観客席を目視したところ約800人ほどであった（翌日の『琉球新報』『沖縄タイムス』両紙朝刊では「約2000人」と掲載されていた）。中高年層の男性を中心としながらも，若い女性グループやカップル，小学生などもおり，米軍の沖縄基地関係者と思われる数人の欧米人男女の姿も見られた。常連客と思しき人びとは，折りたたみ椅子や座布団などを持参していた。観客は取り組みに動きが見られないときは盛り上がりに欠け，思い思いに話したり，飲食しながら観戦していた。会場にはビールとタバコのにおいが立ち込めていた。

試合の合間に本部席からアナウンスが入り，金品の寄贈者名が告げられる。個人の寄贈では５千円から１万円が相場のようである。横綱戦の「優勝」のほかに，勝者の中から特別に与えられる賞には，「殊勲賞」「敢闘賞」「技能賞」「特別賞」があった。

翌日付の『琉球新報』『沖縄タイムス』両紙朝刊の「市町村」面には，大会の結果が写真と星取表入りで大きく掲載されていた。先述の入場券とともに手渡された取り組み表を見ると，連続する週でおこなわれる３つの大会は，主催者はもちろん異なるものの，いずれも琉球新報社による共催と沖縄タイムス社による後援は変わらなかった。また，勝利牛に掛けられる化粧まわしにも大きく「優勝　琉球新報社」と書かれており，地元新聞が，沖縄本島地域の闘牛大会の開催を支えていることがうかがえる。

最後に，牛そのものについて記述しておくと，取り組み表に産地が明記されているものの中で，１トンを超えるような横綱クラスの大型牛は，岩手産が目立っていた。あとは，全体に徳之島産の牛の比率が多く，沖縄本島産・与那国産は１頭ずつであった。しかし，翌週の大会では番付上位は沖縄本島産で占められているので，沖縄闘牛全体の傾向とは言いがたい。さらに，特徴的なことは，徳之島の勝利牛を沖縄にトレードしてきた例が多く見られたことである。ここから徳之島と沖縄とのあいだには頻繁な交流があることがうかがえる。

3．宇和島予備調査報告（西村明）

2005年10月開催の宇和島の闘牛大会は，ちょうど徳之島の大会と日程が重なっていたため，徳之島へは尾崎と桑原が，宇和島へは西村が向かった。宇和島では闘牛大会の観察と，『南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書』の主任調査員で自らも牛主の経験をもつ清水昇氏へのインタビュー，以前使われていた「和霊土俵」と「南宇和観光闘牛場」の見学をおこなった［愛媛県教育委員会文化財保護課編　2002］。ここでは，闘牛大会の様子に，清水氏からの聞き書きの一部を織り交ぜて報告したい。

「宇和島闘牛大会　秋場所定期大会」（主催：宇和島市観光協会，主管：宇和島闘牛運営委員会）は，2005年10月23日日曜日の正午から丸山公園内の宇和島市営闘牛場で開催された。入口付近には牛を乗せてきたトラックが並び，宇和島駅からのシャトルバスも往来していた。窓口でチケット（3千円）を購入し，11時30分に会場入りしたが，中では「宇和島音頭」が流れていた。会場は16角形のドーム型で雨天でも開催できるようになっている。土俵の周りを鉄製の柵が囲むスタイルは，徳之島や沖縄と同じだが，柵の横棒は竹でできており（竹矢来），清水氏の説明によると，牛を傷めないための配慮であるという。また牛の入場口は左右の2箇所あり，対戦する牛が双方から入ってくるようになっているのは，徳之島や沖縄の闘牛場とは異なっていた（ただし，南宇和観光闘牛場の入場口は1箇所であった）。土俵と人の背丈ほどの段差がある客席のあいだには土俵と同じ高さの約2 m幅の空間が設けられているが，そこには，カメラマンたちが構えていた。客席の後方の壁面には大型のボックス型スピーカーが四方に設置され，取り組み中には技などについて詳しく解説される。沖縄同様，会場の外に牛舎が設置されているが，こちらは仕切りの壁はなく，出場を待機する牛は一定の間隔をおいてつながれていた。

客席は沖縄同様，土俵を取り囲む階段状の座席が9段設置され，1800人から最大で3000人まで収容可能となっている。開始15分前の時点では700人ほ

どの入りで，大会開始後徐々に増え，倍近くの約1300人の入場者数となった。観客は入口に設営されている売店で，弁当やお茶，日本酒などを購入し，試合開始を待ちながら，飲食・歓談していた。客層は60代以上の男性が中心で，６～７割を占めるが，同年代の女性の姿も１割ほど見られる。ほかには，小学生前後の子供連れの家族や，10代から20代の若者のグループ・カップルなども見られた。もちろん１人で見物している客もいたが，大方は複数のグループ客，あるいは顔見知り同士が合流した集団であった。会場の一角には近くの和霊小学校のための予約席となっており，小学生と保護者が見学していた。清水氏によれば，市営闘牛場ができる以前，女性には，試合見物はおろか，牛主の家族であっても試合当日の牛の見送りさえ許されなかったという。

12時になると取り組みに先立って，観光協会の代表として市長が挨拶し，続いて運営委員会の会長の挨拶があった。市長の挨拶で，小学生たちに向かって，若いうちから闘牛に慣れ親しみ，将来の闘牛文化の担い手になるよう呼びかけていたのが印象的であった。

宇和島の闘牛では，牛の入場を促す呼び出しにひとつの形式がある。例えば，「おーい，宇和島市ー，丸勝牛をー，出せよー，出せよ」といった具合で，本部席からマイクを使って呼び出しを行うわけだが，どの取り組みにおいても声の調子が一定している。これは沖縄や，徳之島には見られない特徴である。しかし，呼び出しの後，牛が入場してくる際には，進軍ラッパ・太鼓・指笛などの鳴り物が使われ，徳之島の闘牛の影響が見られる。清水氏によれば，徳之島や沖縄から牛を購入することによって，売主関係者が応援にくるようになったためということであった。

また，取り組みと取り組みの合間にチャンピオン牛の「土俵入り」を行うのも，宇和島闘牛の特徴のひとつである。牛は豪奢な化粧まわし（ユタン・ウチカケ）や紅白の帯（ヒダリマキ）などをつけて土俵内を竹矢来にそって，練り歩く。その際，優勝旗や幟旗をもった人々が随行する場合もある［愛媛県教育委員会文化財保護課編　2002:46-48］。この土俵入りにおいても，牛の入場と同様の鳴り物が使われるようになったのは，近年の傾向であるようである。

沖縄同様，取り組みを行う牛には尾の付け根のところに紅と白の短いはちまきを巻いて識別が行われている。しかし，清水氏によれば，観光化される以前はこのようなことはされておらず，もともとはその場所にお守りをくくりつけていたという。

牛の角に関していえば，宇和島の場合，上に向いたものが好まれ，牛は顔面を土につけるような格好で，角同士を合わせ相手の額を傷めるような戦い方が主流であった。したがって，そのような形にするために仔牛のころから「角作り（矯正）」を行ったそうである。宇和島に仔牛を出荷していた大分でも，もともと角作りは行われていたようで，その意味でも宇和島の需要と合致していた。

しかし，奄美・沖縄から来る牛は，ほとんど角作りがされておらず，角が横を向いており，横から敵の牛の耳の後ろを攻めるため，これまでそのような経験のない相手の牛は驚いて，取り組みをやめることもあるという。また，九州牛は丸角が多かったが，近年の牛は平角で角そのものがあまり強くないそうである。この角の形の変化は，勢子のスタイルの変化も招いている。

勢子はそれぞれ４～５人ずついて交代するが，勢子の構え方，あるいは牛に対する介助の仕方に大きく２パターンあることが見て取れる。ひとつは，沖縄とまったく同じ，牛から少し離れたところで大声をあげながら右手と右足で勢いをつけるやり方で，主に10～20代の若い勢子に多く見られた。他方は，右手を牛の肩のところに，左手を牛の耳の後ろあたりにそえ，牛にぴったりと付いた格好で，「ハイハイハイ」などと呼びかけながら，攻めのタイミングをはかるやり方である。こちらのパターンは，そのほとんどが50～60代の勢子であった。清水氏によれば，奄美や沖縄から横向きの角を持つ牛が多くなり，勢子も近づくことを恐れて，牛に触れない前者のパターンを採るようになったのだろうという。また，角に関して付け加えれば，沖縄の取り組み同様，勝利牛の角にタオルを巻きつける取り組みも見られた。

勢子同士の交代については，以前は戦局への影響を考え牛の後方からゆっくりと沿うように交代していたが，いまでは，直接勢子の背中をたたくケー

スが増えてきたと，清水氏は指摘している。取り組みの中には勢子のいない牛も見受けられたが，これについて清水氏は，これまでの取り組みの経験から人間嫌いになり，取り組み中に人を寄せ付けないようになるのが理由であると説明した。中には，人間嫌いから会場の雰囲気も嫌がり，取り組みを放棄するものもあるそうである。

今回の闘牛大会の牛紹介のアナウンスによれば，沖縄（本島・八重山）産や徳之島産の牛が多く認められたが，中には隠岐産の牛も存在した。そこで，清水氏からの聞き書きをもとに，宇和島の闘牛牛の交流ネットワークについて述べてみることにする。

宇和島は牛の産地ではないため，当初は対岸の大分（玖珠郡・大野郡）や熊本から農耕牛を小船で買い付けていたようで，その中から闘牛に向いた牛をトレーニングしたという。また，生産地ではないので，闘牛用の牛は大切に育てられたそうである。

1962～63（昭和37～38）年ごろ，宇和島の牛主の一人で鮮魚店を営むＫ氏が，鳥取県の境港に出入りする鮮魚の仲卸業者から，闘牛の盛んな隠岐では秋の八朔の闘牛大会が終われば闘牛の牛は肉牛にされるらしい，という情報を入手し，よい牛を求めて隠岐に向かっている。それ以来，隠岐とは頻繁な牛と人の交流がはじまり，清水氏も隠岐から何頭か牛を買ったことがあるそうである。昭和40年代の取り組み表には「原子力」「沖嵐」「国鉾」などの隠岐の牛の名前が登場している［愛媛県教育委員会文化財保護課　2002:102］。隠岐の牛の特徴は，性格が短気で速戦型に向いており，それまで宇和島闘牛の中心であった九州牛が，持久型であったのとは対照的であった。また，隠岐の闘牛では，勝った牛の背中に次々に人が飛び乗ることが多くあるそうで，その結果，勝ち続けた牛の中には，人間を恐れて人間嫌いになる牛も現れるという。そのような場合，先述のように，勢子をつけないことにつながる。したがって，清水氏は以前，人間嫌いになって取り組みをしない可能性のある負けなしの牛ではなく，あえて隠岐の大会では負けた牛を買い付けて，宇

和島で戦わせたこともあるという。

沖縄との交流は意外に古く，沖縄の本土復帰以前の1952～53（昭和27～28）年辺りに，沖縄から牛の買い付けにやってきて，「一力」という牛が沖縄に連れて行かれて活躍したという。沖縄では「やぎづの」という名で伝説的な牛となり，清水氏が後に沖縄の闘牛を観戦に行ったときには「やぎづのは強かった」という話を聞かせてくれた人もいたという。近年では逆に，沖縄本島産や八重山産の牛が，多く宇和島の闘牛に出場している。

徳之島との交流は兵庫の西宮経由で牛主のＳ氏が徳之島の牛を買ったことがきっかけで，「奄美」という名で戦っていたことが昭和40年代の取り組み表に見られる［愛媛県教育委員会文化財保護課　2002:98］。

以上のような他地域との交流の中でも，新潟の旧山古志村（現長岡市）近辺との交流が最も古く，1876（明治９）年から双方の牛を博労が東京に連れていき「興行」として戦わせていたという記録がある。1913（大正２）年には両国の旧国技館で５日間の興行があり，現愛南町の「小幡牛」が新潟牛に勝ったという新聞記事が存在する。

以上のような地域との活発な交流のほかにも，現在は闘牛がおこなわれなくなっている八丈島とも1965（昭和40）年から交流がはじまり，交換トレードしてきた牛が「八丈島」という名で活躍したそうである。また，一時期は岩手の牛も買っていたが，大会でほとんど取り組みをしなかったそうである。

このように，他地域との牛の交流によって，宇和島にはがんらいの九州牛以外の牛が多く登場してくることになったわけだが，その事実は宇和島の闘牛に変化をもたらしていることは，先述の牛の入場・土俵入り・勢子のスタイルの変化に表れているといえる。したがって，牛の交流が人の交流を促し，延いては他地域の闘牛文化が流入し，もともとの宇和島の闘牛のあり方に大きな影響が及ぼされる結果となっていることがうかがえる。

4．徳之島予備調査報告（桑原季雄）

徳之島では毎年１月，５月，10月に全島一を決める闘牛大会が開催される。5月に闘牛の共同研究を行うことを決めた尾崎，桑原，西村の３名は，９月の尾崎と西村の沖縄での闘牛調査に続いて，10月22日と23日に徳之島と宇和島で開催される闘牛大会を分担して調査することにした。西村は宇和島へ飛び，尾崎と桑原は徳之島へ飛んだ。鹿児島を10：45分発の飛行機で飛び立ち，12時前に徳之島空港へ到着した。早速レンタカーで島内を右回りに徳之島町の亀津へ向かう途中のある集落で，全島一闘牛大会の出場牛の幟が，恐らく牛主の屋敷であろう，その門前に立っているのが見えた。また徳之島町亀津では，闘牛大会の案内を流しながら通り過ぎる宣伝カーとすれ違ったりもして闘牛大会の雰囲気を感じた。我々は亀津からさらに，前夜祭として軽量級優勝旗争奪戦が行われる伊仙町目手久の闘牛場へ向かった。以下では，22日と23日にそれぞれ伊仙町と天城町で開催された闘牛大会の観戦記を中心に記述し，最後に今後の研究の方向性を示して本節を締め括りたい。

軽量級優勝旗争奪戦

午後５時半に東目手久闘牛場に到着すると，すぐ闘牛場の入り口前のテントで3000円の入場券と10組の対戦表が印刷された一枚のカラープログラム（Ｂ４版）を受け取り，１箇所しかない正面の入り口からはやばやと闘牛場の中へ入った。直径20メートルほどの土俵を鉄柵が取り囲み，その外側にコンクリート製の階段席が取り巻く。午後６時開始であったが，開始30分前の会場内は閑散としていた。お馴染みの島唄「ワイド節」の音楽が流れる中，開始15分前頃から急に増え始めて次第に観客席が埋まっていった。800人から千人の観客がいたようである。客層は中年以上の男連れが一番多く目に付いたが，小さな子から高校生あたりまでの子供たちや女性も多く見受けられた。ビールやジュース，お菓子などを売る出店も階段席の一番高いところに陣取り，対戦が始まると若い女の売り子がビールとジュースの飲み物を売って回った。

午後6時ちょうどに第1戦目の闘牛が一頭ずつ花道からワイド，ワイドの囃子と太鼓に先導されて入場する。取組は10戦あり，東西に分かれて，番付の低い方から順に，封切り，若手特番，花形，特番，小結，特番，関脇，大関，横綱（優勝旗争奪戦）の順で戦われる。3戦目の花形戦と4戦目の特番戦との間に軽量級優勝旗返納の儀式と主催者である東部闘牛愛好会の代表による挨拶があった。

第1戦は東方の亀津地区の「突撃チワワ」と西方の地元目手久地区の「大勝花形功真」のデビュー戦で，12分16秒で「突撃チワワ」が勝利する。場内アナウンスは，およそ2分おきに，経過時間を告げる。闘牛の動きが激しくなると会場も太鼓や歓声で盛り上がるが，動きがない間は静かに見守り，勢子の「エイサー」の声と土を踏みならす音だけが響いてくる。勝敗が決着すると，牛の持ち主とその家族や関係者が土俵の中になだれ込んで，ワイド，ワイドの掛け声とともに牛の背に飛び乗って手舞い足舞いで喜びを表現する。

第2戦目は鹿児島の「突撃美心」と地元面縄地区の「徳神建設号」の若手特番の対戦である。角を突き合わして2分経過したところで，場内アナウンスが，徳之島警察署よりのお願いとして，闘牛賭博をしないようにとの放送を2度繰り返す。さすがに伊仙町だと，興味深く聞き，すばやくノートに書きつけていると，隣の40歳前後の男性が，「それも書くのか」と横から声をかけてきた。我々のことを新聞記者と思ったらしい。その後は伊仙町民だという彼に，時折話しかけたり，あるいは話しかけられたりしながら観戦する。彼も闘牛牛を仔牛の時から飼って育てていて，近々デビュー戦の準備をしているとのことであった。その牛は八重山から買ったそうで，彼によれば徳之島の牛の多くは八重山牛とのことであった。

第3戦は21分経過したところで，勝負がつかず，実況アナウンサーは観客に，引き分けにしていいかどうか問うため，引き分けでいいと思う人は拍手をするよう求める。観客の拍手が大きいことを確認して，対戦時間22分で引き分けを宣言した。

第3戦終了後すぐに，軽量級優勝旗の返納式が主催者や関係者が陣取る土

俵の正面の席の近くで執り行われ，主催者の挨拶も含めて約10分中断した。

第４戦は２連勝中の徳之島町手々地区の「手々青年団荒磯号」対，地元伊仙町の検福地区の「昇軍」の対戦で，10分９秒で「手々青年団荒磯号」が勝利し，また，第５戦は徳之島町花徳地区の牛が，牛主が大阪在住の「寝屋川小力」を７分16秒で破った。第６戦・第７戦は小結同志の対戦で，地元目手久地区の牛がそれぞれ天城地区と亀津地区の対戦相手を，それぞれ１分28秒と17秒という速攻で退けた。第８戦の関脇戦は，地元伊仙町喜念地区対沖縄の対戦で，２分３秒で地元の牛が勝利した。また，ここで，殊勲賞，敢闘賞，技能賞のアナウンスがなされた。

第９戦の大関戦は，３連勝中の亀津地区の「クロフネ」が目手久地区の「松井虎鉄」を20分26秒という長い試合で制した。このとき，「松井虎鉄」の勢子が闘牛と接触して転倒しケガをするというアクシデントが発生した。勢子は自力で観客席に逃れたが，すぐさま関係者が駆けつけ，救急車を呼び，病院へ搬送された。

闘牛開始から２時間15分を経過して，いよいよ最後の横綱戦となる。牛主が鹿児島の吉村畜産で４勝２分の「タキネトガイ」に対し，元沖縄軽量級チャンピオンで６勝３敗１分の亀津地区の「当原戦士栄号」が挑戦し，13分37秒の死闘の末，「タキネトガイ」が防衛に成功した。

以上，12頭の出場牛のうち，牛主の出身地別で見れば，天城町１頭，徳之島町６頭，伊仙町７頭，その他，鹿児島２頭，沖縄，名瀬，大阪が各１頭となっている。また，元沖縄で戦っていた闘牛が４頭参加している。さらに，牛主が団体名を名乗っている牛も５頭みられた。

全島一優勝旗争奪戦

翌10月23日（日）に，今回の徳之島闘牛大会のメイン・イベントである「全島一・中量級優勝旗争奪戦」が，天城町闘牛協会主催のもと，徳之島闘牛連合会の後援を受けて，午前10時から同町の平土野闘牛場で開催された。会場には約２千人（主催者発表）の観客が詰め掛け，１トン前後の巨体同士が繰

り広げる激闘を見守った。前日の21日の地元『南海日日新聞』の第３面には，一面すべてを使っての企画広告が打たれ，徳之島の闘牛大会の主だった取り組みについて詳しい解説が牛のカラー写真とともに掲載されていた。

９組18頭が東西に分かれての対戦で，番付は，下から封切が１組，花形が２組，指名特別が１組，大型が１組，そして小結，関脇，中量級（大関），全島一（横綱）の９組であった。地区別に見れば，徳之島町から５頭，天城町から４頭，伊仙町から８頭，沖縄から１頭の参加である。審判団は３町から１人ずつ３名があたり，白旗を挙げて勝敗を判定する。勢子は３人ずつと決められており，東西に分かれて赤と白のハッピを着けることになっているが，当日はかなり日差しが強く暑かったせいか，３人の勢子が短時間で頻繁に交代することが多かった。茶髪の若い勢子の姿も多く目についた。対戦が始まる前に，土俵中央が塩と焼酎で浄められる。会場内の正面席に向かって右側に牛の入り口があり，土俵を取り巻く階段席はコンクリート製ではなく，草茫々であった。午前10時きっかりに闘牛大会が開幕し,対戦する牛が１頭ずつ牛主と一族や支援者の太鼓の音と浄めの塩をまく露払いに先導されて入場した。

第１戦は６分43秒で決着し，第２戦は16戦目の大ベテラン牛と，経験の浅い牛との対戦で，34分23秒の長丁場の末，引き分けとなり，じゃんけんで勝敗を決定した。対戦の途中，場内アナウンスで，徳田衆議院議員からの祝電の披露やスポンサーのレストランの宣伝やスポーツクラブの案内がなされた。第４戦は２戦目の牛とデビュー戦の牛との対戦で，13分11秒で後者が勝利した。

この後，優勝旗の返納の儀式があり，徳之島闘牛連合会長の挨拶が続く。第５戦は今大会最長の試合となり，40分で引き分けた。実況アナウンサーは２，３分ごとに経過時間をアナウンスし，たくみにスポンサーのPRを織り込んでいく。第６戦は３分で決着がつき，第７戦からいよいよ小結，関脇，中量級，全島一という大一番に入る。闘牛開始から２時間が過ぎた12時15分に始まった小結戦は16分11秒で決着がつき，勝利した牛が技能賞を獲得したことも告げられる。また，名瀬市からの闘牛ツアーの一行に対する感謝のア

ナウンスもなされた。第８戦の関脇戦は伊仙地区の牛と２年ぶりに沖縄から帰郷した牛との対戦で，４分17秒で伊仙の牛が勝利した。大関同士の第９戦の中量級優勝旗争奪戦は中量級チャンピオンで８連勝中の「基山一撃」対チャレンジャーで５連勝中の「戦闘武蔵」の対戦である。「基山一撃」は関西在住の徳之島出身者が隠岐で買い求めた牛を徳之島で飼育した牛である。連勝牛同士の戦いということで注目を集めた一番は，対戦から５分経過後に王者「基山一撃」の右角が根もとから10センチくらいのところで折れるというアクシデントにみまわれた。勢子はすばやく角を拾うと土俵の脇に投げて戦いを続行したが，右角から流血しているのを見て場内は騒然とした。緊張した戦いとなったが，９分27秒で「基山一撃」がチャレンジャーを下し４度目の防衛に成功した。熱戦が終わったあと場内は興奮の渦となった。勝利と同時に，ハッピに鉢巻き姿の牛主や一族と関係者が土俵になだれ込んで，牛を取り囲み，老若男女が次々に牛の背にまたがり，勝利の喜びを体いっぱいで表現していた。

横綱戦となる最後の全島一優勝旗争奪戦はこれまで16連勝の「福田喜和道１号」対チャレンジャーで３勝１敗の「柏木建設号」の対戦であった。両牛とも１トンクラスの大きな牛で，開始早々，王者が挑戦者に押し込まれる場面もあったが，徐々に持ち直して５分７秒でチャレンジャーを退けて勝利を収め，９度目の防衛に成功した。勝敗の決着と同時に土俵中央に牛主と支援者が押し寄せて，チジンダイコに合わせてワイド節のリズムと手舞いで歓喜した。主催者側からすぐに優勝旗とトロフィーが牛主に手渡され，午前10時闘牛開始から３時間20分が経過した午後１時20分にすべてが終了した。観客は最後の勝敗が決まると同時にすばやく席を立って，あっという間に闘牛場から姿を消した。土俵の中には，一部のファンが化粧まわしがかけられた全島一の「福田喜和道１号」と写真を撮ろうと群がっていた。観客席がすっかり空になったころ，「福田喜和道１号」と一族が勝利の喜びを太鼓のリズムに乗せ手ながらゆっくりと会場を後にしていった。

以上のような闘牛観戦や今回の徳之島調査から徳之島の闘牛の特徴としては以下のようなことが指摘されるであろう。

1）島内に（伊仙町，天城町，徳之島町）に13ケ所の闘牛場があり，正月，5月，10月の本場所と地方場所をあわせると年20回程度，大会が開催されている。また，全島一大会のような大きな大会は午前から開催される。

2）全島大会（横綱決定戦）は年3回行われる。徳之島町，天城町，伊仙町の3町持ち回りで開催され，横綱牛は出場を義務づけられている。その他の闘牛大会の興行は，必要な手続きを取れば，誰でも催すことができる。主催者は半年以上も前から出場する牛の交渉や後援者募集に奔走する。主催目的としては，同窓生の記念行事や厄払い行事として開催する大会も多いという。また，正月，ゴールデンウィーク，お盆などの帰省客が多く島に帰るときは，連日どこかで大会が催され，観光客よりも帰省客に楽しんでもらおうという雰囲気があるという。

3）大会前には，宣伝カーが走り，町中には闘牛大会のポスターが貼られ，また，牛主の家の門には幟がたつこともある。

4）取組表には，「横綱」，「大関」等以外に「指名特別」，「大型特別」，「指名花形」，「封切特別」等がある。

5）闘牛場には応援団席が設けられ，牛が勝つと場内（リング内）で手舞い，足舞いをして勝利を祝う。自分の牛，または応援する牛が勝ったとき，牛を取り囲み，今や徳之島の闘牛文化の代表曲ともいえる島唄「ワイド節」の歌や太鼓のリズムに乗せて手舞い足舞いをして喜びをストレートに表現し祝福する。大会前日に親戚，友人達が一堂に集まり大会当日の勝利を祈って前祝いを行い，また，大会に勝利すると祝賀会が朝まで開かれる。

6）闘牛と経済生活との結び付きが指摘される。正月が終わると，サトウキビの製糖期間が終了する4月末まで闘牛のオフシーズンに入るが，サトウキビのシーズンオフに合わせるように5月には闘牛大会が開催

され労働の疲れを慰撫する社会的機能をも果たしている。それだけでなく，闘牛が中心軸となり，例えば年中行事などのリズムが枠どられていく。即ち，闘牛が催されることによって，人々の経済・社会活動が活性化するという側面もある［山田　2004：215］。

7）観光資源として，徳之島観光パンフレットや観光情報誌，新聞などへの情報提供およびテレビ紹介などを行っている他，島内外の闘牛ファンに向けて，民間業者によるビデオの製作販売なども盛んに行われている。

8）徳之島の闘牛は，県や町の行政の援助も無く，また無形文化財でも無く，闘牛好きな有志達の活動だけで成り立っている。

9）島の人にとって闘牛牛を所有することは祖先崇拝であり，家，一族の宝であり，家の繁栄の象徴でもある。牛の勝利が祖先を慰め，子孫の繁栄を約束するため，牛の勝敗に固執する［小林　1997; 山田　2004：215］。そして全島一（横綱）を育て上げるのが牛主の夢である。

10）闘牛牛に牛主の名前や会社名，グループ名をつけることが多い。最近では仲間で牛を持ち，連帯感を強め，喜びを分ち合う場面が多く見られる。

11）昔の闘牛牛は島内産が多く占めていたが，最近は十島村，沖縄，八重山，隠岐島，新潟，岩手，宇和島など日本各地から導入されているという。

12）「島の伝統である闘牛を大切にしよう」と，島西部にある私立樟南第二高校で，昨年4月に闘牛クラブ「徳之島伝統闘牛文化研究会」が，全国で初めて発足したことが挙げられる。島に3校ある高校ではこれまで，高校生同士で牛を購入し，世話をすることや，勢子に出ることなどを禁止し，闘牛に対しては否定的であった。島の闘牛には賭博がつきもので，闘牛場の一角には賭博目的の男たちが固まっていたりして，闘牛場は教育上よくないという声があることや，牛舎が飲酒や喫煙の非行行為の温床となること，闘牛に付き添う勢子には危険が伴う

などというのがその理由だった。これに対して，樟南第二高校の田中福徳校長は「闘牛は島では数百年も続いてきた伝統であり，唯一の娯楽。島から闘牛が無くなると，若者が半分以下になる。だめならどこが駄目なのかをはっきりさせ，島の発展のためにも一緒になって盛り上げていかなければならない」（銭本隆行「慰みの闘牛」『産経新聞』2004年11月12日夕刊）と言う。同研究会では，闘牛を実際に飼育し，餌の牧草の栽培や草刈り，角研ぎ，勢子のやり方などを学ぶことを主な活動内容としている。部員は男子35人，女子５人の計40人が集まり，早速，その年の全島一大会で伝統闘牛文化研究会の牛「樟南第二高校男桜」を出場させ，部員の一人が勢子をし，吹奏楽部も応援に島唄「ワイド節」を演奏して盛り上げた。

最後に，徳之島では闘牛開催地同士の交流が活発になり，闘牛の国際化も進みつつあることが近年の特筆すべき変化として指摘しうる。2005年５月３日午前，伊仙町の伊仙闘牛場で「第８回全国闘牛サミット記念闘牛大会」があり，会場には徳之島内外から約5000人の闘牛ファンを集めた。大会に先立って行われたオープニング・セレモニーでは，地元の中学生が勇壮な『仙鼓坊太鼓』を披露し，島唄の第一人者・坪山豊さんが「ワイド節」で場内を盛り上げ，また，伊藤祐一郎・鹿児島県知事，大久保明・伊仙町町長，鮫島文秀・徳之島闘牛連合会会長，韓国清道郡（慶尚北道）の朴鎭洙・議会議長などがそれぞれ挨拶をした。徳之島と国内の他の地域との闘牛交流を示す一例として，新潟県中越地震で被災した旧山古志村（現長岡市）から徳之島に引き取られた闘牛「戦闘龍亜理沙（マキバオー）」が花形戦に新潟代表として登場し，同町の「朝戸一力」と対戦したことが挙げられる。対戦結果は，数回角を突き合わせたものの，途中で戦意を失い，１分38秒で敗れたとのことであるが，引き分けが前提の新潟とは勝負に対する迫力が違い，戦う気力が出なかったのだろうと気遣う声も聞かれた（南日本新聞2005年５月４日）。

また，同日開催された第８回全国闘牛サミット（主催・徳之島闘牛連合会）には，全国の闘牛文化を守り続けてきた５県７市町村の首長や闘牛団体の代

表者，韓国からも11名が参加し，全国の闘牛開催地同士のネットワークを構築し交流を深めるとともに，国外にも闘牛の魅力を発信していくことを確認し，闘牛文化を地域資源として活用していくことなどが話し合われた。そもそも韓国との交流は1999年に和牛３頭を韓国へ２年続けて送り，韓国の赤牛と対戦させたことに始まるという。日韓戦と銘打ったおかげで，プサン近くにある知名度の低かったその地の闘牛場は，総計数十万もの観客を集めるほどの大イベントが開催できたとのことであった［中野　2001：95］。

以上，本節では，徳之島の闘牛大会の観戦をもとにした報告を中心に，徳之島の闘牛の特徴や現状をみてきた。これまで徳之島の闘牛に関してはすでに多くの一般書や，少しずつではあるが研究論文も出るようになってきたが，国内のいくつかの闘牛開催地や闘牛生産地を結ぶ牛と人の流れについての詳細な研究はほとんど見られないばかりか，韓国や中国など東アジアの闘牛文化を有する地域との牛と人の流れや闘牛交流については未だ研究のフロンティアといえる。こうした闘牛の国内的および国際的ネットワークに焦点を当てた研究こそ，今後の我々の共同研究がめざすものである。

５．今後の展望（尾崎孝宏）

最後に，本論の総括と今後の展望について簡単に述べたい。既に繰り返し述べているように，我々の実見した数少ない事例を通じても，現在各地の闘牛が個別的に存在しておらず，人や牛の移動というハード的・それに付随する文化というソフト的な両面において，複数の地域が関連するネットワークが少なからぬ意味を有していることは明らかである。牛の移籍，勢子のスカウト，あるいは入場や勢子のスタイルといった面に，超地域的なネットワークの存在を垣間見ることができる。ゆえに今後の問題は，このネットワークをいかに切り取って提示するかに尽きると言えよう。

現在，差し当たって解決すべき問題の一つに，牛のライフヒストリーに即した移動誌の把握という課題がある。これはすなわち，ある闘牛牛がどこで

生まれ，どのような経路・戦歴をたどって一生を終えるのか，というライフコースの問題である。従来，徳之島の伝説的な横綱牛「実熊牛」というような例外的な存在についてはそのライフコースは明らかにされているが［小林1997］，いわゆる普通の牛がどう生きているのか，という問題に答える実証的研究は存在しない。この疑問を解決すべく，「闘牛プロジェクト」では本年度中（具体的には2006年１月）に，まず仔牛の産地，すなわち牛のライフコースの開始地点として闘牛関係者には有名である八重山諸島におけるフィールドワークを行う予定である。

また，日本国内におけるネットワークとして，隠岐・新潟・岩手といった各地の闘牛の現状把握を行い，より面的な理解の深度を深める必要がある。この点に関しては基本的に来年度以降の課題となるが，単に上述の個々の地点に関して現状を把握するのみならず，日本国内における闘牛ネットワークの行政的表現形である「全国闘牛サミット」についてもフィールドワークを行う必要があると考えている。また，上述の地域に関しては「闘牛プロジェクト」が今年度行った調査地域と比較して研究の蓄積が乏しいという現状に鑑み，単にネットワーク的な側面という我々の興味関心に沿った研究を進めるだけでなく，基礎研究とでも呼ぶべき地域の詳細な事実関係の記録を中心とする研究を，地元の研究者等と連携して進めていく必要があるだろう。こうした連携体制を構築していくためのカウンターパートの確保も，来年度以降の課題である。

さらに海外へ目を転じると，闘牛サミットという枠内で日本国内の闘牛開催地と交流関係の存在する韓国慶尚北道が否応なく視野に入ってくる。そして現状としては直接的な交流関係は存在しないものの，韓国国内の他の地域および，そもそも東アジアにおける闘牛発祥の経緯と関連して無視できないであろう中国国内（特に西南中国の少数民族地域や江南地方）における闘牛も考慮する必要があろう。これら地域における研究はまず何らかの方法で言語的な障壁をクリアーするという問題が当面の課題として存在するが，「闘牛プロジェクト」としては２～３年というタイムスパンで言語的障壁の解決

および現地カウンターパートの確保という課題に取り組みたいと考えている。またこれに関連して，中国の古代習俗に関する研究蓄積の中から，闘牛に関連する文献を収集する作業も必要となるだろう。

さらに，こうした問題の解決には，単に個別の研究者の熱意や能力といった個人的問題のみならず，複数の研究者が関わる研究プロジェクトをいかにマネージメントしていくかという側面にも考慮する必要があると想像される。こうした研究者間の連携・分業体制の確立は本来的に文科系の研究者にとっては不慣れな，誤解を恐れず敢えて言えば「苦手な」分野であると想像されるが[(4)]，こうした苦手を克服して文科系研究者の共同研究体制の一つのモデルを構築することも，長期的には本プロジェクトにおいて一定程度の解決が必要な課題であると考えている。

注

(1) 筆者の確認しえた限りでは，現在東アジアでは徳之島，沖縄本島，八重山諸島，宇和島，隠岐，新潟（長岡市・小千谷市），岩手（山形村），韓国慶尚北道，韓国慶尚南道，韓国全羅北道，中国貴州省，中国江蘇省で闘牛が行われている。また，1988年9月までは八丈島でも闘牛が行われていた［石井　1990a：33］。

(2) 具体的な調査日程と参加者は以下のとおりである。沖縄：2005年9月11-12日（尾崎・西村），徳之島：2005年10月22-23日（尾崎・桑原），宇和島：2005年10月22-24日（西村）。

(3) 2003年3月に開催された「第9回 ヒトと動物の関係学会 学術大会」の発表抄録(http://www.hars.gr.jp/9th.taikai/symposium/ishikawa/ishikawa-syouroku.htm)によれば，石川は宇和島の後に隠岐における闘牛の調査も行っているという。

(4) この点に関して，筆者は文理融合型プロジェクトの推進を例として「文理融合型研究プロジェクトと文化人類学者―中国乾燥域オアシス地域研究を例に」というエッセイをWeb上で発表している（http://asj.ioc.u-tokyo.ac.jp/html/030.html：東京大学東洋文化研究所 アジア研究情報ゲートウェイ）。

参考文献

石井 幹　1989　「日本の闘牛―1―」『畜産の研究』43(12):1359-1362。
　　1990a　「日本の闘牛―2―」『畜産の研究』44(1):31-35。
　　1990b　「日本の闘牛―3―」『畜産の研究』44(2):249-253。
石井浩一　1992　「愛媛県における闘牛興行の復興過程に関する研究」『スポーツ史研究』5:25-35。

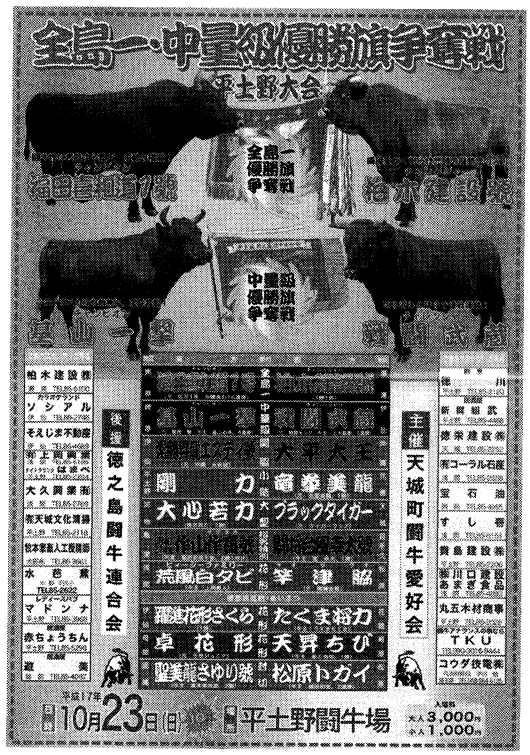
1993 「愛媛県南予地方における闘牛について—幕末から明治期を中心に」『愛媛大学教養部紀要』26(2) :1-17。
石川菜央 2004 「宇和島地方における闘牛の存続要因—伝統行事の担い手に注目して」『地理学評論』77(14) :957-976。
愛媛県教育委員会文化財保護課（編）
2002 『南予地方の牛の突きあい習俗調査報告書』愛媛県歴史文化博物館。
ギアツ,C. 1987 「ディープ・プレイ—バリの闘鶏に関する覚え書き」『文化の解釈学Ⅱ』(吉田禎吾他訳)，岩波書店。
小林照幸 1997 『闘牛の島』新潮社。
謝花勝一 1989 『牛国沖縄・闘牛物語』ひるぎ社。
曽我 亨 1991 「徳之島における闘牛の飼育と,その分類・名称・売買の分析—人々はいかに闘牛を楽しんでいるか」『日本民俗学』188:1-48。
中野和敬 2001 「長生きして闘牛に熱中 徳之島」青山享編『薩南諸島－21世紀への挑戦』鹿児島大学多島圏研究センター。
広井忠夫 1998 『日本の闘牛：沖縄・徳之島・宇和島・八丈島・隠岐・越後』高志書院。
2002 「国指定重要無形民俗文化財越後闘牛と伊予闘牛の習俗の比較」『高志路』346:10-22。
藤原 弘 2001 「研究発表会講演要旨 岩手県釜石市橋野町和山牧場における短角種牛選抜角突き合わせ(闘牛)の変遷について」『日本獣医史学雑誌』38:76-78。
前宮清好 1972 『沖縄の闘牛』石川製パン所。
松田幸治 1982 『徳之島の闘牛』南国出版。
2004 『闘牛研究』南国出版。
山田直巳 2001 「徳之島の闘牛：文化論的考察」『民俗学研究所紀要』25:37-64。
2002 「隠岐闘牛の儀礼的世界(上)」『民俗学研究所紀要』26:25-47。
2003 「隠岐闘牛の儀礼的世界(下)：都万村『八朔牛突き』を軸に」『民俗学研究所紀要』27:71-104。
2004 「闘牛の社会経済的考察：徳之島社会研究への予備的アプローチ」『民俗学研究所紀要』28:193-217。

新聞記事（署名記事のみ著者・タイトル情報を示す）
沖縄タイムス2005年9月12日
銭本隆行「慰みの闘牛」産経新聞2004年11月12日夕刊
南日本新聞2005年5月4日
琉球新報2005年9月12日

参考写真

1．取組表（沖縄）

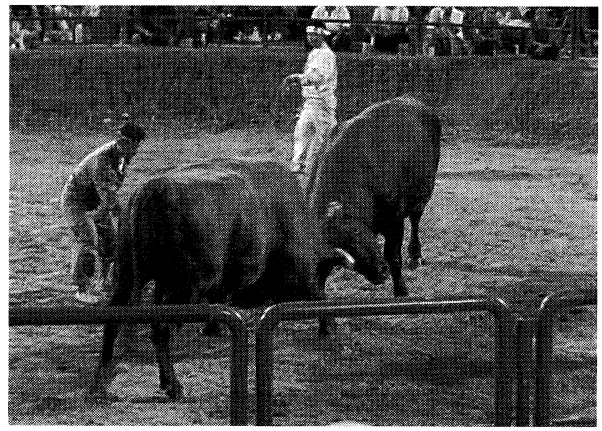
2．取組表（徳之島）



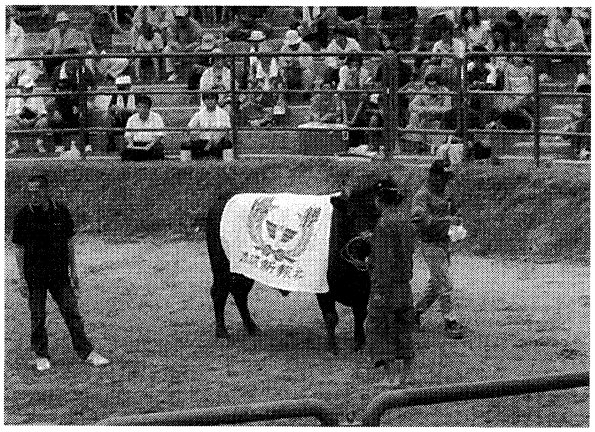
3．取組表（徳之島）

4．取組表（宇和島）

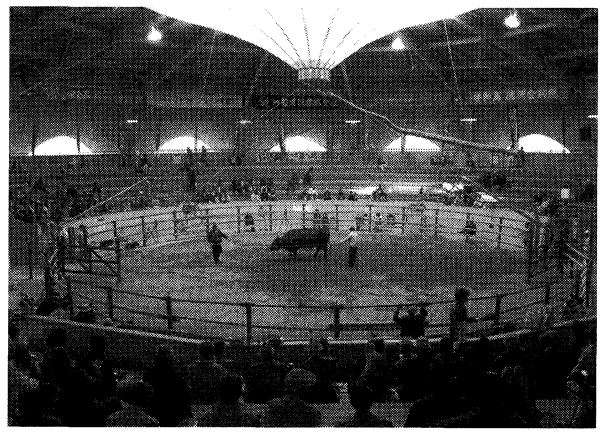
5．入場チケット（徳之島）



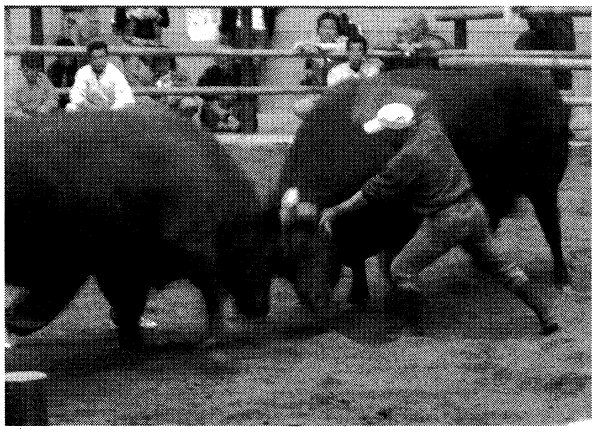
6．取組風景（沖縄）



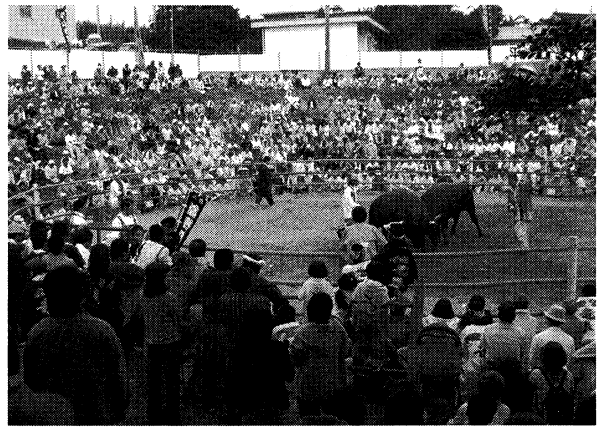
7．優勝牛（沖縄）



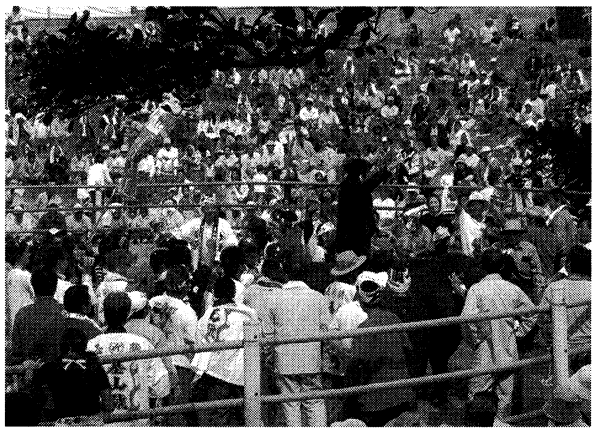
8．闘牛場（宇和島）



9. 取組風景（宇和島）



10. 取組風景（徳之島）



11. 勝利後の光景（徳之島）

12. 優勝牛（徳之島）